

智歯抜歯の周術期に失神発作をきたした歯科治療恐怖症の1例

田中 翔子, 瀬戸 美夏, 古賀 さよ,
青柳 直子, 早川 慶祐, 高岡 昌男,
喜久田利弘

福岡大学医学部医学科歯科口腔外科学講座

要旨：歯科治療恐怖症患者は、歯科治療に特化して強い恐怖心を抱く。明確な診断基準はない。当科では Spielberger らの状態－特性不安検査（STAI）を用いて観血的処置前の患者不安を評価し、不安段階がⅣ以上の患者を歯科治療恐怖症と判定して精神鎮静法を併用している。今回、歯科治療恐怖症患者における下顎埋伏智歯抜歯の周術期に意識消失発作を経験した。患者は27歳、女性。術前 STAI にて状態不安段階がⅤと高く、歯科治療恐怖症と診断した。1回目の抜歯時、静脈路確保時に「怖い」という訴えがあった。しかし、循環動態問題なく、静脈内鎮静下にて抜歯術を施行した。十分な安静後の術後の注意事項の説明時に失神した。術翌日の早朝、起立時にも失神をきたした。2回目の抜歯術時の静脈路確保時にも失神が起きた。3回の失神は疼痛と不安に関連して起こった。歯科治療恐怖症患者に対する疼痛刺激への十分な配慮の必要性を反省させられた。

キーワード：歯科治療恐怖症, 埋伏智歯, 失神, 静脈内鎮静法